

この問題は、災害を専門に調査研究している人が非常に少ないことから生じている現象でもある。

災害が発生し、それを現地調査し、その結果を分析して調査報告あるいは論文が発表される。同一の災害は再び発生しない、たとい前の災害の時と同じ季節に同一区域内に同量の雨が降っても災害は同じではない。河の状態（河床・堤防等）が前回と違っているはずだし、社会の状態（人口、家屋の分布状態、都市形態、防災対策等々）が違っている。そのため、同じ気象要因によって発生した災害でも災害の起り方が一つ一つ違う。このような災害の調査報告は、何はともあれ、まず、可能な限り災害現状の詳細を把握し、報告することが望ましい。その次には、過去の災害の起り方とどこが違うか、そしてどこが類似しているか、対比を行なって欲しい。詳細な報告があっても、この対比が欠けていることが多い。次に、同種類の災害の季節による被害の受け方の変化、地域による災害の現われ方の違い、その歴史性を分析して

もらいたい。

このような分析はとうてい個人の調査では困難なことであり、集団による調査が望ましいわけである。昭和28年北九州の大水害以後、集団による調査と研究が行われるようになった。だが、その集団調査も、報告書を見ると、各分野の人々が集まって調査したとはいいながら、調査結果の分析にまで協同研究を行なっているとは思えないものが多い。経済学者は経済学者だけで、自然科学者は自然科学者だけで分析が行われている。そして、その調査分析結果が調査報告としてまとめられていると思われる節がある。

経済学者も、自然科学者も、お互いの分野に対する相手の無知（極端ないい方ではあるが）を承知の上で、教育しあいながら、相手の知識と調査方法論、そして結果とを、お互いの立場から批判し理解し、相補いあってゆくような調査研究がなされることを期待して止まない。

理 事 会 便 り

7月11日に開かれた第15回常任理事会の決議事項は次の通りです。出席者は畠山理事長および正野、伊東、吉武、今井、磯野、村上、岸保、有住、根本、淵の各理事（順序不同）

1. 数値予報シンポジウムの準備委員会が正式に発足することとし、委員長に畠山理事長が当ることとなった。準備委員会の構成はつぎのとおりである。

数値予報国際シンポジウム準備委員会の構成

委員長 畠山久尚

- (1) 企画委員（幹事 正野重方）
正野重方 伊藤博 岸保勘三郎 窪田正八
松本誠一 村上多喜雄 今井一郎 鍋島泰夫
都田菊郎 寺内栄一 新田尚
- (2) 庶務委員（幹事 正野重方）
イ 国内関係
畠山久尚 正野重方 淵秀隆 吉武素二 伊藤博
ロ 外国関係
正野重方 磯部谷郎 須田建 毛利圭太郎
- (3) 会計委員（幹事 吉武素二）
吉武素二 益子康

なお、準備委員会の費用として予備費から5万円をま

わすことにする。

2. 朝日賞等の推せんの時節を全国理事にあらかじめ文書で周知させるようにし、天気にも告示する。
なお、推せん内規はおって作成する。
3. 秋季大会のスケジュールを天気8月号に掲載する。
4. 高等学校地学科の廃止解体に関する件については、8月21日月例会後に結論を出す。
5. 集誌編集委員として倉嶋氏多忙のため渡辺和夫氏に委員をお願いする。
6. 集誌投稿規定中「16ページ以内」とあるのを「原則として16ページ以内」とし、「超過分については、1ページあたり1500円の印刷費を投稿者が負担する」をけずる。
7. 今井委員よりの申出による特別講演の謝礼金は月例会の費用の枠外とし、その支出についてはその都度理事会にはかって可否をきめる。
なお、謝礼は交通費は別にして1件につき2,000円とする。
8. 気象集誌に Abstract（概報）をのせることにし、伊東理事がその案を次回までに作成する。